九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

心の状態とは何か ： ムーアのパラドックスについて

安居，誠

https://doi.org/10.15017/1398595

出版情報：哲学論文集. 29, pp.75-92, 1993-09-24. 九州大学哲学会
バージョン：
権利関係：

心の状態とは何か

――ムーアのパラドックスについて――

安居　誠

序

「雨が降っているが、私はそうは思わない（It is raining but I don't believe it.）」。

マルコムの証言によれば、ヴィトゲンシュタインはムーアの業績で自分が非常な印象を受けた唯一のものは、右のような文に含まれている特異な種類の無意味さを発見したことだと語ったという。[1] 彼はこれを「ムーアのパラドックス」と呼び、『哲学探究』第二部で主題の一つとして論じた。その準備はケンブリッジでの最後の講義や『心理学の哲学』として知られる草稿の随所で繰り返されている。これに対して、我々はむしろ当惑を覚える。通常パラドックスとは、それが真であると考えても偽であると見なしても消去できないような矛盾を生じる命題を云う。しかるに冒頭の命題――ないしは非命題（Unsatz）――は、形式論理的な意味での矛盾を示すものではない。「信じる（believe）」という動詞が我々の信念、我々の心の状態を

記述するものであるとすれば、雨は降っていないとする私の信念が、雨は降っているという客観的事実とともに言明されてはならない理由はない。しかし一方このことは、ムーアの命題が何か論理的に特殊なものであることを意味するわけではない。例えば「この断片は緑色である」と「この断片は赤色である」との論理積さえも、いわゆる構文論的矛盾をなすものではない。[2] 我々は問題をこんなふうに片付けたくなる。ムーアの命題は矛盾でもパラドックスでもなく、ただ我々の言語生活のなかで占めるべき位置を持たず、従って無意味なのであると。

しかし前述の講義の翌年、ヴィトゲンシュタインは覚え書きに記している。「ムーアは彼のパラドックスで哲学の蜂の巣をつついた。そして蜂たちがしかるべく飛び出さなかったのは、彼らが余りに鈍かったからにすぎない」。[3] 我々鈍すぎる蜂たちが最初に注意しなければならないのは、ヴィトゲンシュタインにおける「パラドックス」の用法がさきに述べた一般的な意味から隔たっていることである。この「逸脱」は言わば方法的で首尾一貫している。彼の場合、この言葉を我々がその出現を最も期待する場所、すなわち数学的・論理数学的な文脈のなかで用いることはまずない。『数学の基礎』や同名の講義録においては、パラドックスという語が現れること自体皆無と言ってよい。[4] その理由は、要するにヴィトゲンシュタインがそこにパラドックスを見なかったということにつきる。彼にとって数学とはつねに機械であり、計算である(eine Maschine, ein Kalkül)。[5] そこでは論理的な可能性と現実的な選択のあいだに懸隔は存しない。我々は我々のなしうることをなす。あるいはむしろ、計算がそのなすべきところをなすのである。数学の領域に「思いなしに反する」ことがありえないのは、そもそも何かを「思いなす」ための場がそこに存しないからにほかならない。数学において、例えば「ラッセルの矛盾(der Russellische Widerspruch)」が姿を表すことはある。[6] しかしそれが「パラドックス」となるのは、ただ数学に関する我々の思いなしにおいてのみなのである。

ヴィトゲンシュタインは本来、我々が何かを「信じる」ないし「思念する」ような場面につきまとうある種の還元不可能な二律背反を示すためにのみ、パラドックスという言葉を用いる。そして我々の解釈によれば、この二律背反を最も顕著な

仕方で体現しているのが、ほかならぬムーアのパラドックスなのである。だがここで試みられるのは、当のパラドックスを「解決する」ことではない。我々の課題は、数学的な矛盾の場合と同様、我々を不安にする我々の言語の状態、パラドックスが解決される以前のそれを展望できるようにすること（übersehbar zu machen）なのである。[7] それに関連して、我々はここで《心の状態とは何か》という問いに答えるわけではないし、答える準備をするつもりもない。我々はむしろ、小論においてこうした問いを括弧に入れる。それに対する判断を留保したまま「心的動詞」を分析することが可能になるような場所を標定することが、ここで試みられる。表題においてこの問いが実際に引用符で囲まれていないのは、それが以下の考察全体によって遂行されるべきものであるからにすぎない。

I

しかしながら、《心の状態》がそれ自体として何であるのか、そのような状態がそもそも存在するのか、存在するとすれば、それはいかなる意味においてか等々といった事柄をいっさい不問に付したまま、我々は心的動詞について何かを、つまり語るに値するようなものを語ることができるのだろうか。できる、と我々は考える。『断片』に収められている最後の断章が、この点で示唆を与えてくれる。「《君は、神が他の人間に語っているところを聴くことはできず、君が語りかけられている当人であるときだけ、それを聴くことができる。》――これは文法的な所見である」。[8]

これはいかなる意味で「文法的」なのだろうか。いま私に二重括弧のなかの文が示されたとしよう。私は神がそれ自体として何であるかを知らず、そもそも神が存在するか否かを知らない。この所見がいかなる精神から発せられたものであるかも、私には分からない。しかしながら、私はこれに同意し、むしろ自明であるとさえ考える。この言明を支持するために、神が存在することを証明するには及ばないし、言明の語り手ないし聞き手が神は存在すると信じている必要すらない。そう

した意味論的連関や語用論的文脈は、ここでは言わば遮断されている。問題の所見が真であるとすれば、それは文法的に真なのである。同様に、それが偽であると主張することは、神という言葉をその文法とともに拒否することでしかない。にもかかわらず、我々はここで神の本質に何ほどか触れているように思われる(文法学としての神学)[9]。本質という概念は、何らかの形而上学の体系を構築することと本来無関係である。むしろこのような意味論的・語用論的な還元においてのみ、我々はそれが現れてくる場に立ち会うことができるのである。「本質は文法のなかに言い表されている(Das *Wesen* ist in der Grammatik ausgesprochen)」[10]。

もう少し、例を我々の問題に近づけてみよう。「知ること」と「信じること」のあいだにある区別、それも本質的な区別とは何か。一般には、「知ること」がその対象に関する意味論的含意を伴うのに対して、「信じること」はそうでないと考えられている。確かに、我々が「彼は…を知っている」の代わりに「彼は…を信じている」と言うのは、信念の現象と知識のそれとのあいだに何らかの差異があり、前者の特性を彼のうちに見出したからではない。むしろ、彼がそれを知っていると言えば、我々自ら、当の(おそらく我々自身は信じていないか、その真偽に関してとくに意見を持たない)命題の真理に関与することになるからである[11]。従って我々は、「彼はPを知っている」が実際にPが妥当することを含意するのに対して、「彼はPを信じている」から導かれるのは、ただ彼がPを信じているということにすぎないと言いたくなる。しかしながら、ここで言及されている結びつきは偶然的なものにすぎない。もし私が「彼はPを知っている」と言明した後に実際にはPでないことがわかったとしても、「彼はPを信じている」と言った後に彼がPを信じていないことが明らかになった場合と同様、私は事実を誤認したにすぎず文法的な誤りを、すなわち我々の言語に習熟した者であれば誰でも指摘できるような誤りを犯したわけではない。従って、こうした定式化は系統的な混乱を含んでいる。我々の表現で言えば、それは《還元》が不十分なのである。

知っているという語を正しく使用できるために、実際に何かを知っている必要はない。同様に、私が何かを信じていると

言うとき、それを本当に信じていなければならない理由もない。そして、これは行動主義とは無関係である。両者のあいだに違いがあるとすれば、それは純然たる文法上の区別でなければならない。例えば、「彼はPを信じているが、そうではない」という構文が許されるのに対して、「彼はPを知っているが、そうではない」は決して許されないというような区別がそうである。このことは、Pが現実に妥当しているか否か、言明の対象である彼がPを本当に信じているか否か、主体としての語り手がそれらの一方または両方の根拠を提示する用意があるか否かといった世界に内属する諸々の文脈によって左右されることがない。「思いなし（Vorstellungen）とは何であるかとか、ひとが何かを思いなしているとき、そこで何が起こっているのかと問うてはならないのであって、《思いなし》という語がどのように使用されているかを問わなければならない。しかし、このことは、私が言葉についてのみ語ろうとしているということではない」[12]。我々が言語において出会う一つの逆説は、言葉のうちに徹底して沈潜する限りにおいてのみ、それを超えて何かを語り出すことができるということなのである。

本題に入ることにしよう。まず、『哲学探究』第二部十章において、問題のパラドックスは最初にどのような形で規定されているのだろうか。

「ムーアのパラドックスは次のように言い表すことができる。《私は事態がこうであると思う》という表現は、《事態がこうである》という主張と似た仕方で用いられる。しかしながら、私は事態がこうであると思うという仮定は、事態がこうであるという仮定と似た仕方では用いられない、と」（190c）。

ここでヴィトゲンシュタインは、何か神秘的で不可解な事柄を述べているわけではない。表現は極度に圧縮されているが、その論旨はむしろ明快である。『心理学の哲学』などから補足してみよう。「雨が降っているのに、私はそう思っていないとすれば（Angenommen, es regnet und ich glaube es nicht）」と言うとき、私の仮定はもちろん無意味ではない。信念と現

実の乖離はつねに起こりうる。ところが私がこの仮定の仮定していることを主張しようとすると、言わば私の人格（meine Persönlichkeit）は分裂してしまう。ただし、ここで《私の人格が分裂する》というのは、私がもはや通常の言語ではなく、別の文法を持ったそれを生きることになるという意味である。[13]

問題になっている無意味さの所在をもう少し限定してみよう。まず「雨が降っているが、彼はそう思っていない」や「雨が降っていたが、私はそう思わなかった」などは何ら無意味な表現ではない。これに対して、「雨が降っているが、私はそう思わない」というそれは明らかに無意味である。しかしながら、《雨が降っているのに、私はそう思わない》という事柄そのものは無意味でもなければ不可能でもない。むしろきわめてありふれた出来事にすぎない。従って、こうした事態を表す命題が仮定法、不定法ないし接続法で用いられているかぎり、背理（Unsinn＝無意味）は生じない。「《雨が降っており、私はそう思っていない（Es regnet und ich glaube es nicht）》は、私が仮定のつもりであれば（ich es als Annahme *meine*）意味を持つが、主張や報告のつもりであれば意味を持たない」。[14] 要するに「思う」ないし「信じる」という動詞は一人称単数の直説法現在において、言わば《意味の特異点》を持っている。[15] あるいはヴィトゲンシュタイン自身が『講義』で用いている表現によれば、それらの用法は「非対称」なのである。

この特異点と対照するために他の変化型ではなく、なぜ仮定の形だけが繰り返し引き合いに出されるのだろうか。ハレットは『探究』の別の箇所との関連を示唆している。[16] すなわち、「主張のなかには仮定が含まれており、この仮定が主張されている当のものであるとするフレーゲの見解」（二二節）に対する批判である。当該の箇所で反駁のために用いられている例文が「雨が降っている」であることは、これを裏書きするように思われる。いずれにせよ、第二部十章においてムーアの命題から引き出される結論はこの見解と相容れない。私が主張しているのは何か異常なこと、ありえないことであるのに対して、私が仮定しているのはきわめてありふれたことにすぎないのである。「それゆえ、まさしく主張の《私は思う》は、仮定の《私は思う》が仮定していることの主張ではないかのように見える！」（190d）。

従って、ヴィトゲンシュタインが問題の動詞の用法を非対称と呼ぶのは理由の無いことではない。というのは、数学や論理学における非対称性とは本来、二つの項について、一方の他方に対する関係が他方の一方に対するそれと一致しないことを意味するからである。またヴィトゲンシュタインがここで「…かのように見える」という言葉を使っているのは、実際にはそうでないという含みを持たせるためでもなければ、後から撤回する準備でもない。それは、言葉に対応する出来事や実体化された概念ではなく、言葉の用法そのものに焦点を結ぼうとする態度にほかならない。我々は、《意味》という語に前者のような含意を与えないという条件のもとで、論点を際立たせるためにあえて端的な表現を用いる。心の状態を記述すると考えられている動詞、「思う」や「信じる」は直説法現在の一人称単数において、それ以外の変化型とは異なる意味を表すのだと。

II

これは、一見してそう思われるほど無謀な主張ではない。我々にはむしろ、これに対してヴィトゲンシュタインが用意した架空の反論のほうが奇妙に思われる。「私は雨が降るだろうと思う」という言明は「雨が降るだろう」というそれに似た意味を、すなわち似た適用を持つのに対して、「私はそのとき雨が降るだろうと思った」は「そのとき雨が降った」に似た適用を持たないことを指摘した後、ヴィトゲンシュタインはこれに反論して見せる。「《しかしながら〈私は思った〉は、〈私は思う〉が現在において言っているまさしくそのことを過去において言うのでなければならない。》——ともかく、$\sqrt{-1}$は$\sqrt{1}$が1に対して意味しているまさしくそのことを-1に対して意味するのでなければならないのだから！」(190e, f)。ヴィトゲンシュタインはこの素朴な反論が誤っているとは言わない。彼によれば、それは「全く何も言っていない (Das heißt gar nichts.)」のである。

彼の言わんとするところを理解するために、我々も例として数を取り上げてみよう。誰かが私に尋ねたとする。0は他の数がそうであるのと同じ意味において数なのか、それともそれは、負の数を表す記号がそうであるように単なる位取りの記号にすぎないのかと。私はこれにどう答えるべきか。例えば、7が6と8に対して意味するのとちょうど同じことを、0は−1と1に対して意味すると言ったところで答えにはならない。それは整数の体系を構成した後に、つまり0を数の一員として迎え入れた後になって初めて言えることにすぎない。問題は、我々が0に他の数と異なった振舞いを要求することである。演算の結果が一義的に決まることを保証するために、0による除法は許されないのに対して、他の数にはそれに相当する制限がない。しかし、これは問題の解答を直接指示するものではない。従って0は数でないと言えば、我々は一つのゲームを選択することになり、にもかかわらず0は数であると言えば、また別のゲームを選択することになるのである。そして、直説法の《私は思う》もその活用系列全体のなかで、言わば《原点》と呼ぶべき特異な位置を占めているように思われる。だがそれは、そこから全活用型が導出できる唯一真正の範型としてではなく、むしろ、他の変化型がそこからの隔たりによって規定されるような特権的な不在として捉えられる限りにおいてなのである。

実際、ヴィトゲンシュタインは「信じる」という動詞が直説法の一人称現在形を欠いていると主張する。[17] 第二部十章にある一節は、そうした連関においてのみ理解できる。「《誤って信じる（fälschlich glauben）》という意味を持つ動詞があったとしても、それは直説法の現在において意味のある一人称を持たないだろう」(190j)。一見してわかるように、これはムーアのパラドックスのわずかな変形にすぎない。しかしそれは我々に後者の重要な含意を気づかせてくれる。すなわち「私はPを誤って信じている」が無意味だとすれば、「私はPを正しく信じている」も同様に無意味である。誤って信じることが不可能である以上、「正しく」という語がここで果たすべき役割はない。間違ってもいなければ正しくもない信念。従って、直説法の《私は信じる》という動詞は本来存在しえない。それは、我々が自分自身の信念を本当は信じていないというのではなく、むしろ自分自身の信念を疑うことが意味をなさないということである。「我々は自らの感覚に不信を抱く（mißtrauen）

ことはできるが、自らの信念に不信を抱くことはできない」(190i)。そして我々は、何かを疑う可能性があらかじめ排除されているようなところで、それを「信じる」ことはできない。

一方でまた、ヴィトゲンシュタインはこうも述べている。「一人称の《私は思う》は三人称なしでも十分存在しうる。なぜ、現在の一人称だけを持つような動詞が言語において形成されてはならないのだろうか」[18]。これが同じ事柄の異なる表現であることは明らかであろう。さて、我々はここで誤った問いに迷い込まないよう注意しなければならない。直説法の《私は思う》が「本当は」何を意味するのかと問うことがそれである。これは自然で有効な問いに見える。しかし、例えば虚数が実際には何であるかという問いに対して、数学者が「それは実数とは異なる数である」という以上に内実のある答えを用意しているわけではない。確かにヴィトゲンシュタインは、《私は事態がこうであると思う》が《事態がこうである》と似た意味を持つと述べている。しかしここで似た意味を持つとは、すぐあとに明言されているように似た適用を持つということであり、さらに似た適用を持つとは、まさしく《私は事態がこうであると思うが、事態はこうでない》という構文が許されないことそのものを指すのである。従って、ヴィトゲンシュタインが「《私はPであると思う》は《Pである》と概ね同じことを意味する」と繰り返し言明したとしても[19]、それはムーアのパラドックスを「説明する」ものなどではない。問題は、直説法の《私は思う》が何であり、仮定法が何であるかということではなく、むしろ両者の関係ないし無関係を明確にすることである。

「異なる概念がここで触れ合い、一部は一致する。すべての線が円であると思わなければならないわけではない」(192j)。一部の線弧が一致すれば全体の一致する円がここでは対称性の象徴として引き合いに出されている。実際円は完全な対称性を示すのであるが、我々の言語についても同じことが言えるわけではない。「当の線は仮定において、すでに君が考えているのとは違っている」(192g)。『心理学の哲学』はこの点を明確にしている。「むしろそれが存在しえない(sie *könne* nicht bestehen)と考えるかわりに、結局のところ同形性ないし対称性(Gleichförmigkeit, Symmetrie)が存在するに違いないと我々が信じていることは、我々の習慣になっている言語を考察する仕方に特徴的である」[20]。ヴィトゲンシュタインがさきのような「説明」

を受け容れ、それに基づくパラドックスの「解決」を提案しているように見えるときにも、実際には、彼はこの対称性の欠如を絶えず視点をずらしながら確認しているにすぎない。

例えばヴィトゲンシュタインは、「思う」という動詞を持たない架空の言語を提案する。「《私はそうであると思う》が、《そうである》という主張の口調によってのみ、表現されるような言語。そこでは《彼は思う》の代わりに、《彼は…と言いたがっている》と言われ、また《私が…と言いたがっていると仮定すれば》という仮定（接続法）も存在するが、《私は言いたがっている》という表現は存在しない」(191e)。《そうである》という主張に付加される口調とは、おそらく自信のなさそうな、ためらいがちの口調であろう。第二部十章の最後に置かれた言葉は、この文脈でのみ理解できる。「気の弱い主張を気の弱さの主張と見なしてはならない」(192m)。《私は思う》が何を意味するにせよ、それは心の状態の記述や報告ではありえない。ここで二つの論点を混同しないことが肝要である。第一に、ムーアのパラドックスは、おそらく今日知られているほとんど全ての言語に翻訳できると思われるが、それでも論理的な観点からすれば、その発生は偶然的なものにすぎない。これに対して、パラドックスの背後にある非対称性そのものに関しては、これを本質的なものと見なすことができる。「ムーアのパラドックスはこのような言語には存在しないだろう。しかしその代わり、或る変化形を欠いた動詞が存在することになる」(191f)。どのような言語を想定しても、それが我々の心的生活を記述するのに十分な多様性を具えているかぎり、この非対称性を除去することは不可能である。その意味において、これを「客観的なもの」と呼ぶこともできる。

しかし、そのあとに続く文はさらに重要な示唆を含む。「だが、我々がそれに驚くことはない。自分自身の未来の行動を、意図の表現において予言できるということを考えてみよ」。この謎めいた注釈は何を意味するのか。例えば、《私は今夜友人に会うことを意図する（会うつもりでいる）》という事態は、《私は今夜友人に会う》という言葉によって表現できる。しかし、《私が今夜友人に会うつもりでいるとすれば》というもとの事態の仮定は、もはや《私が今夜友人に会うとすれば》という仮定によって置き換えることはできない。ところがこれは、冒頭のパラドックスを定義した章句のうち、動詞部分だけを

入れ換えたものと見なすことができる。このことは、ムーアのパラドックスの背後にあって、これを規定する非対称性が、心の状態を表すすべての動詞――ヴィトゲンシュタインの表現によれば「心理学的動詞」――に共通の特性を示すものであるという可能性を開く。[21] 個々の動詞について検討を加える余裕はないが、『探究』で次のように語ったとき、この点がヴィトゲンシュタインの念頭にあったことは間違いない。「《信じる》、《願う》、《意志する》といった動詞が、《切る》、《噛む》、《走る》といった動詞の持つような文法形態をすべて示すということを自明なことではなく、何か非常に奇妙なことだと見なせ」(190k)。

III

ムーアの命題は、心理学的動詞の活用において異なった概念が交叉していることを明らかにする。しかし、ここでヴィトゲンシュタインが何らかの新しい方法論に従っているわけではないことは強調しておくべきであろう。すでに『論考』において、彼は「記号のうちに表現されていないものをその適用が示す。記号が呑み込んでいるものをその適用が口に出す(aussprechen)」と述べている。[22] あるいはより直接的には、「記号においてシンボルを認識するためには、それが有意味に使用される仕方に注意しなければならない」という一節を挙げることができる。[23] ここでシンボルとは、感性的記号と区別された限りでの意味の担い手、フレーゲ的な伝統における「概念」を指すものと理解されている。原子的要素命題という形而上学的な仮構が背景に退くにつれて、このような考えが次第に前面に現れてくる過程を、いわゆる後期思想への転回と見なすことができるとすれば、「語の意味は言語におけるその使用である」とする『探究』の有名な命題は[24]一般に信じられているほど無害で無内容な主張ではないことになる。

さて、問題の非対称性とは一体何なのだろうか。なぜ、我々は心理学的動詞からこの特性を除去することができないのか。

ムーアのパラドックスの場合と同様、我々はこの「なぜ」に対して、何らかの説明を与えることはできない。しかし当該の現象をそこに置き戻して理解すべき、より広汎な文脈を指示することはできる。ヴィトゲンシュタインに対する反論を考えてみよう。我々はいま、語の意味が言語におけるその使用であるというのは、決して無害な主張ではないと述べた。このことから帰結するように見える困難の一つは、「私は彼の無実を信じている」という主張に対して、誰かが「君は彼の無実を信じてなどいない」と言ったとしてもそれらの動詞が異なっている以上、二つの発言は矛盾しないということである。この場合、私自身がそのことを知っていたとしても、彼の言葉に同意することはできない。彼の発言自体は私の主張と矛盾しないにもかかわらず、私がそれを認めることは間違いなく自己矛盾になるからである。従って、私は彼の言葉を否定し、自分自身の言葉の真実を訴える以外にない。これに対して、彼は彼で自らの判断の根拠を示し、私の主張に反論を加えることになる。しかし、私の肯定するものが彼の否定するものの肯定でないとしたら、そもそも我々は何を議論していることになるのだろうか。これは、この問題に関するヴィトゲンシュタインの立場が維持し難いことを端的に示しているのではないか。

結論から言えば、これはヴィトゲンシュタインの主張に対する reductio ad absurdum にはならない。というのは、この場合、私が何を信じているのか自分以外の誰かと議論できることが仮定されているわけだが、これはおよそ自明な前提とは言い難いからである。我々は、答えを出すことによって初めて、本来何が問われていたのかを明らかにすることができる。従って、何かが議論の対象になりうると主張するためには、その議論が何によって決着するかをあらかじめ規定できるのでなければならない。しかるに、問題になっている関係の非対称性とは、まさしくこの可能性が原理的に閉ざされていることを意味するのである。「心理学的諸概念の取り扱いのための草案」というタイトルの付されている『断片』の一節にこうある。「心理学的な動詞は、現在形の三人称が観察によって検証できるのに、一人称はそうでないということによって特徴づけられる。三人称現在の文は報告であり、一人称現在は表現である。(完全には一致しない)[25]」。同じことは『探究』の三七七節でも別の文脈のもとで言及されている。「ある表象の赤さの基準は何か。私にとって、他人がそれを持っている場合には、彼が

言ったりしたりすること。私にとって、私がそれを持っている場合には、全く何もない」。心理学的動詞の一人称現在・直説法がその他の変化形に対して非対称（asymmetric）であるのは、それらが文字通り、同一の基準ないし尺度（metron）を共有していないということにほかならない。

注目すべきなのは、ヴィトゲンシュタインがここで、観察によって検証できるという三人称の基準に対して一人称の基準を対置しているのではなく、むしろその存在を明確に否認していることである。《私は思う》は根拠を持たない。このことは、それ自体何らかの不確実性を示唆するものではないし、逆にそれが原初的直観のような特権的認識であることを意味するわけでもない。重要なのは、一方にとって基準であるものが他方にとってはそうでないという関係の非対称性だけであり、この通約不可能性こそが《心の中》という閉ざされた領域を可能にするのである。「私は私自身の言葉に対して他の人々とは全く異なる態度を取る。《私は思っているように見える》と言うことさえできれば、私はかの続き（jene Fortsetzung）を見出すことができるだろう」（192b, c）。かの続きとは無論《思う》という数列の失われた項、直説法の一人称現在形を指す。《私は思っているように見える》と言うことができれば、すなわち《私は思う》が三人称の基準に従うならば、もちろんムーアのパラドックスは解消する。しかし同時に《心の状態》という概念もその適用の場を失う。「《私の表現から判断して、私はそう思っている。》さて、こうした言葉が意味を持つような諸状況を考え出すことができる」（192e）。それは言わば託宣（Orakel）であり、ある種の自動書記であろう。[26] だがいずれにせよ、それらは「我々の心」をめぐる通常の言語ゲームに参画するものではない。

我々は心の状態を、その存在論的身分に関するいっさいの議論から独立に、関係の非対称性として規定することができる。このことは、我々が冒頭で心の状態とは何かという問いを断念したことと矛盾しない。なぜなら、この規定は心という実体の属性として述語づけられているのではなく、それを表現する体系が必然的に具えていなければならない論理的多様性を示すものだからである。このことは何ほどかの成果をもたらさないわけではない。例えば、知識が心の状態ではないというの

はヴィトゲンシュタインの繰り返し主張するところである。すでに引用した部分を含めて、彼が「心理学的動詞」を列挙している箇所に「知る」が登場することは一度もない。我々はその意味を明確にすることができる。《知る》の一人称現在・直説法をムーアの命題に対応させた形、「Pであるが、私はPでないことを知っている」は無意味である。ところが、三人称の「Pであるが、彼はPでないことを知っている」や過去形の「Pだったが、私はPでないことを知っていた」も無意味なのである。同様に「Pであるのに私がPでないことを知るならば」という仮定も意味をなさない。要するに、人称や時制や話法が何であろうとPが妥当しているときにPでないと知ることはできないのである。《知る》の文法は単純で明晰であり、その用法は完全な対称をなしている。

さて「私はそう思っているように見える」は通常の言語において意味をなさない。だが「私がそう思っているように見えるとすれば」はそうではない。無論これは我々の見慣れた風景である。どのように言い換えようとも、心的動詞を用いる限り、我々は掌の上を飛び回る猿のように非対称性から逃れることはできない。しかし明らかに相容れない二つの動詞が、同じ《思う》という語のうちに共存しなければならない必然性はどこにあるのか。ここでは『探究』第二部のムーアのパラドックスに続く章に、その示唆を求めてみよう。そこで論じられているのは、「同じ」図形が三角形の穴に見えたり、立体に見えたり、幾何学的図形に見えたりする「アスペクト視」の問題である。「他の諸形式のあいだにそのような形式のためのいかなる場所も存在しないように見えるならば、君はそれを別の次元に探し求めなければならない。ここにいかなる場所もないならば、それはまさしくある別の次元に存在する」(200f)。ここで言う別の次元とは、物理的に同定可能な図形とは区別される、すでに特定の解釈を含むような相貌、すなわちアスペクトを指す。奇妙なことに、ここでもヴィトゲンシュタインは虚数を引き合いに出す(彼が『探究』で虚数を語るのはこの二箇所だけである)。「この意味においても、実数線上には虚数のための場所はない。しかしながらこれは、虚数概念の適用が、計算の見かけからそう思われるほど実数概念の適用に似ていないことを意味する」(201a)。

両眼の視差が平面的な視覚像に奥行きという第三の次元をつけ加えるように、あるいは実数連続体がそのなかに場所を持たない虚の連続体とともに複素平面を構成するように、心理学的動詞の変化系列において示される相容れない二つの契機は、知性の対象である結晶のように等質で対称的な世界を新たな次元に向かって開く。二つの座標の一方を他の座標の上に変換できることは、前者を後者に還元できることを意味しない。すでに『探究』第一部において「あらゆる主張命題を、《私は考える》とか《私は思う》という留保で始まる命題に（従って、言わば私の内的生活の記述に）変形する可能性」が言及されている。[27] 逆方向の変換についてはすでに述べた（II節）。報告という言語ゲームは、報告がその受け手に報告の対象についてではなく、報告者について知らせるよう適用できる。我々が物差しを検査するために、測定を行うことができるように（1901, 191a）。一般に「物差し（Maßstab）」は、この問題の比喩として有効に働く。例えば、私の踵から臍までの長さが1mであるのと同じ意味において、メートル原器の長さは1mであるのかと問われれば、我々の多くは否定的に答える。にもかかわらず、それらが「長さとして」同じであるとすることがメートル法の、あるいは測定一般の意味なのである。私の踵から臍までの長さが度量衡原器として採用され、逆にこれでパリにある金属器を測ることになっても、こうした事情に変化はない。

心の状態に関しても、これと似たことが言えないだろうか。《彼は思う》は《私は思う》の三人称ではなく、《私は思う》は《私は思った》の現在形ではない。しかしながら我々は日常において、それらが《思う》という点においては同じであるとする――それ自体間違っているのでもなければ、何か意味のあることを言っているわけでもない――奇妙な論法に従っている。「他人の心」を構成するという一見哲学的な試みもその洗練された変形にすぎないように思える。実際にはどちらが《測るもの》で、どちらが《測られるもの》であるかは問題にならない。それらが決して重なり合わないという点だけが重要なのである。いかなる根拠も持たないこの「差異における一致」のなかで、我々は他の存在者の知らない次元を測る単位を定義している。我々はムーアのパラドックスを解決することはできないし、《心の状態》とは何なのか説明することもできない。しかしながら、この「できない」は我々の無能力を意味するのではなく、まさしく言語の限界そのものを示すのである。「哲

学の成果とは、何らかの端的なナンセンスと、悟性が言語の限界にぶつかってこしらえた瘤とを発見することである」。[28]

註

(1) Norman Malcolm, *A Memoir*, pp. 66-7

(2) WWK S. 127, Vgl. ebd. "Der Widerspruch muß kontradiktorisch sein, nicht konträr."

(3) *Vermischte Bemerkungen*, Suhrkamp, S. 558

(4) 一箇所もないわけではないが、いずれにせよここで言われていることに影響を及ぼすような用例ではない。s. z. B. BGM S. 403, LFM p.16

(5) WWK S. 106

(6) BGM S. 256 usf.

(7) PU §125

(8) Z §717

(9) PU §373

(10) PU §371

(11) John F.M. Hunter, Wittgenstein on Believing in *Philosophical Investigations* part II, chapter 10, in *Wittgenstein's Philosophical Investigations* ed. by Robert L. Arrington and Hans-Johann Glock, p. 231

(12) PU §370, ここで Vorstellungen, vorstellen をそれぞれ「思いなし」、「思いなす」と訳したことに異論のある向きには、同書五一八節で引用されている対話篇において、ヴィトゲンシュタインがギリシャ語 doxazein の訳語として vorstellen を採用していることを指摘しておきたい。もちろん「表象」、「表象する」と訳しても、ここでの論点に変わりはない。

(13) BPP I §820

(14) BPP II §280

(15) LPP p. 66, 193, 290

(16) G. Hallett, *A Companion to Wittgenstein's "Philosophical Investigations"* p. 656

(17) BPP I §502, 907

(18) BPP II §279

(19) BPP I §472, 504 usf.

(20) BPP I §907

(21) LPP p. 290, "Let us come back to the 'asymmetry' between "I think" and "He thinks" (and "I thought"). (Any psychological verb will do here.)"

(22) TLP 3. 262

(23) TLP 3. 326

(24) PU §43

(25) Z §472 最後の留保に関しては、一人称現在の直説法とそれ以外の文法形態という二分法がより精確なものと見なされていると解釈できる。

(26) bzw. BPP I §817, LPP p. 66

(27) PU §24

(28) PU §119

引用文献のうち、『探究』第二部については、対訳版の頁数のみを本文中に挿入した。その他の著作に関しては、慣用の省略形と頁数を註に記載した。省略形のうち、さほど一般的でないものを以下に記す。

WWK *Wittgenstein und der Wiener Kreis*, Suhrkamp

BGM *Bemerkungen über die Grundlagen der Mathematik*, Suhrkamp

LFM *Wittgenstein's Lectures on the Foundations of Mathematics,* The University of Chicago Press

BPP *I* *Bemerkungen über die Philosophie der Psychologie Band 1.* Suhrkamp

BPP *II* *Bemerkungen über die Philosophie der Psychologie Band 2.* Suhrkamp

LPP *Wittgenstein's Lectures on Philosophical Psychology 1946-47,* Harvester・Wheatsheaf

（昭和六十三年本学大学院博士課程修了・近畿大学非常勤講師）